

わなばとちの木遺跡 ワナバ・栎の木遺跡

平成21年度「松沢上住宅団地」造成事業
に先立つ緊急遺跡範囲確認調査報告書

2010. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印がワナバ遺跡・橋の木遺跡

序

この度、平成21年度に実施したワナバ・柄の木遺跡緊急遺跡範囲確認調査報告書を刊行することになりました。

遺跡範囲確認調査は、住宅団地造成に先立ち原村土地開発公社から委託を受けた原村教育委員会が実施したものであります。

ワナバ遺跡及び柄の木遺跡は、地権者及び村民有志の人々の努力により縄文時代中期後半から後期前半にかけての集落址であることが判明しております。残念ながら調査記録は残っておらず、詳細な遺跡の性格や範囲などはまだ判明していない点が多い状況です。そのため今回の調査には少なからず期待をしました。

今回の調査では、僅ながら遺物が出土しましたが、遺構の確認は出来ませんでした。この結果、遺跡の性格を知ることが出来ませんでしたが、遺跡の範囲を知ることが出来たことは十分な成果だと思っています。

今回は調査の目的である遺跡範囲を特定することができ、遺構が検出されなかつたため発掘調査を行わないこととなりましたが、今回のような場合、いかなる処置を行うことが妥当であるか、今後検討していく必要があるかと考えているところであります。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたって、県教育委員会のご指導ならびに発掘調査に係る多くの皆様のご協力に深甚なる感謝を表する次第であります。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程で、ご指導を賜った皆様にたいし厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

原村教育委員会

教育長 望月 弘

例　　言

- 1 本報告は、平成21年度「払沢上住宅団地」造成事業に先立ち実施した長野県諏訪郡原村払沢区に所在するワナバ遺跡及び棚の木遺跡緊急遺跡範囲確認調査報告書である。
 - 2 遺跡範囲確認調査は原村土地開発公社から遺跡範囲確認調査の委託を受けた原村教育委員会が国庫からの発掘調査補助金、開発公社からの委託金、村費を調査費用として平成21年5月13日から12月10日にかけて実施した。整理作業は12月11日から2月19日まで行った。
 - 3 現場における記録・写真撮影は佐々木潤、図面作成は五味さゆり、横内かおり、渡部静香が行った。
 - 4 図面等の整理は菊地伸治、トレース作業は五味が行い、遺物の整理は鎌倉光弥、五味、土器の実測と拓本は横内、渡部が行い、実測の一部を株式会社シン技術コンサルに委託した。
 - 5 図面の作成は五味さゆり、執筆は佐々木潤が行った。
 - 6 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
- 発掘調査から報告書作成作業に至る過程で、ご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

目　　次

序	
例言	
目次	
I 発掘調査に至る経過	1
II 調査組織	1
III 発掘調査の経過	2
IV 遺跡の地理的環境と概要	2
1 地理的環境	2
2 遺跡の概要	4
V 調査方法と調査結果	4
1 調査方法と層序	4
調査方法	
層序	
2 調査結果	7
遺構	
遺物	
VI まとめ	9
参考文献	
報告書抄録	

I 発掘調査に至る経過

原村松沢地区に「松沢上住宅団地」造成事業計画が立ち上がり、原村教育委員会に照会がされた。これに対して、原村教育委員会は当該地の一部がワナバ遺跡（原村遺跡番号33）の範囲内に位置しているため、遺跡の保護について原村土地開発公社、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、原村教育委員会の三者で保護協議を行った。

当遺跡は発掘調査がなされているが、調査記録が残っていないため遺跡範囲も明確に把握できていない現状であった。そのため、遺跡の範囲及び、遺構の有無を確認する目的で調査を行い、遺構の確認ができた段階で再度保護協議を行う方向で同意をみることができた。

II 調査組織

平成21年度 ワナバ・栎の木遺跡発掘調査団名簿

事務局 原村教育委員会

教育長 望月 弘
教育課長 菊池 周吾
文化財係長 平出 一治
文化財係 平林 とし美
佐々木 潤

調査団 団長 望月 弘

調査担当者 平出 一治 佐々木 潤
調査参加者 発掘作業 鎌倉 光弥 小林 りえ 五味 さゆり
横内 かおり 渡部 静香
整理作業 鎌倉 光弥 菊地 伸治 五味 さゆり
横内 かおり 渡部 静香



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—阿久—ワナバ—赤岳）

III 発掘調査の経過（調査日誌抄）

調査対象地の一部が山林であり、当初は山林内で調査を実施したが、遺物が出土したことでの伐採を持って再度調査を行うこととなった。これにより調査期間は平成21年5月13日～5月25日、10月13日～12月10日までの一時中断期間をもつ調査となった。

- 5月13日 機材の搬入。グリッド設定を行う。
- 5月14日 北側山林部であるB Q～CW-6～34のグリッドから掘り下げを開始。
- 5月18日 重機の搬入。重機によるトレンチの掘り下げを開始。B Q～CW-6～34グリッドの掘り下げを終了し、東側山林部であるCY～DJ-36～70グリッドの掘り下げを開始。
- 5月20日 土層確認のため、深掘した48ライントレンチの壁面の写真撮影。76ライントレンチの掘り下げ開始。
- 5月21日 重機によるトレンチの掘り下げが終了し、埋め戻し作業を開始。遺物が出土したグリッド付近に新たにグリッドを設定し、掘り下げ作業を行った。
- 5月25日 グリッドの掘り下げが終了し、記録をした後、埋め戻し作業開始。木の伐採のため、一時現場を中断することになり、機材の搬出を行った。
- 10月13日 木の伐採が終了し、試掘調査再開。機材の搬入。
- 10月14日 グリッド設定を行い、調査区北側のグリッドから掘り下げ開始。
- 10月20日 C G-26グリッドから焼土を検出、性格の確認のためグリッドを1m拡張。
- 10月28日 C L-31、B R-21グリッドの深掘を行う。
- 11月4日 深掘を行ったグリッドの壁の土層図を作成。
- 12月10日 埋め戻し作業の終了、機材を搬出し、調査を終了する。

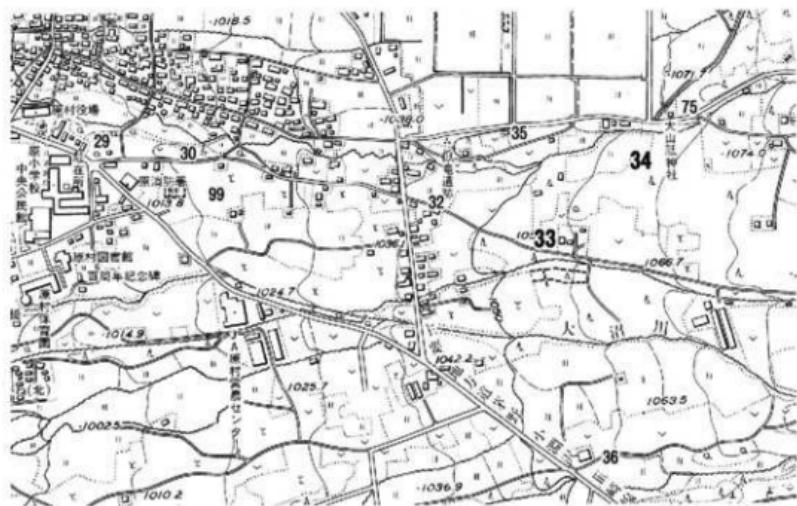
IV 遺跡の地理的環境と概要

1 地理的環境

ワナバ遺跡（原村遺跡番号33）、柄の木遺跡（同34）は、長野県諏訪郡原村松沢区に所在する。原村は八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根が幾筋も見られる。それらの尾根上から緩やかな斜面に繩文時代と平安時代を中心とする遺跡が数多く点在している。

そのうちのワナバ及び柄の木遺跡は南を阿久川、北を大早川に挟まれ、東西に細長い尾根上に位置し、ワナバ遺跡は尾根の中央平坦部から南斜面にかけて、柄の木遺跡は尾根の北側に位置している。遺跡の南にある阿久川は沢が浅く緩やかな傾斜となっている。北にある大早川の斜面は大幅に削平されているため、地形の復元は周囲の地形を元に行ってみると、阿久川に比べ、やや傾斜がきつくなると思われる。

本調査の対象地は、標高約1067m前後を測り、南北約280mの尾根上中央から南側の平坦部にあたる。地目は北側と東側の一部は山林、その他は普通畠となっている。



29 向尾根 30 南尾根 32 大横道上 33 ワナバ 34 横の木

35 障電 36 小沢 75 山の神上 99 中尾根頭

第2図 ワナバ・横の木遺跡と付近の遺跡 (1 : 10000)



第3図 調査区域図・地形図 (1 : 5000)

2 遺跡の概要

〔ワナバ遺跡〕

「信濃史料 第一巻 上」ではハナバ（元屋敷）遺跡と呼称され、縄文時代中期の土器、石器の出土が伝えられているが、これらの史料は開墾の折々に笠原隆光氏が発見し、現在も自宅で保管されている。これまでの遺物及び発掘状況は地権者であった笠原氏が書かれた「笠原 記憶帳」に詳細が記載されている。これによると、昭和20年代の開墾の際、蓋石を有した逆位の埋甕の発見が本遺跡の最初の発見である。この埋甕は底部欠損の縄文中期後半曾利Ⅲ式土器であり、周囲に炉址、柱穴を確認していることから、住居址の出入口部に埋設されていた埋甕であったようである。また、別の開墾中に平板石を合掌式に組んだ石組造構が検出され、その下から骨片が出土した。その後、宮坂英式氏に連絡をとり一先ず埋め戻しを行った後、宮坂英式氏・直良信夫氏らが調査を行い犬の頭蓋骨が発見されている。残念ながら報告書は刊行されていない。その後、昭和50年代までに開墾や道路改良工事などにより遺構や遺物などが確認されているようである。

これまで発見された資料から推測すると、縄文時代中期後半の曾利期を中心としたかなり大規模な遺跡と思われる。住居址は少なくとも20軒以上確認され、これらのうち、記録に残る検出位置と道路工事で破壊された住居址の位置関係を検討してみると、馬蹄形や環状に廻る集落である可能性が指摘できる。しかし、発見された資料の多くは報告されたことがないままであり、正式な発掘調査が実施されていないことから、遺跡の性格は不明瞭な点が多いのが現状である。なお、本遺跡の遺物散布範囲は広く、約三分の一は山林のまま残されているが、これまでの開墾及び、道路改良工事で破壊されてしまったため、保存状態は良くない。

〔桟の木遺跡〕

本遺跡もワナバ遺跡と同様に「笠原 記憶帳」に詳細が記載されている。これによると、昭和5年頃、開墾中に石匙、打製石斧、磨製石斧、凹石、石鐵の出土が本遺跡の最初の発見である。また、昭和40年代には水田造成の際に縄文中期後半曾利V式の土器と無頭石棒の破損品を発見している。これらは住居址に伴っていた資料のようであるが、発掘調査は実施していない。

遺構の発見は少ないが、採集された遺物から推測すると、縄文時代中期後半から後期前半の遺跡と思われる。ただし、遺物の散布範囲についてもはっきりしておらず、ワナバ遺跡に比べ遺跡の性格はよりいっそう不明瞭な点が多い。水田造成に伴い大きく削平されているため、遺跡の保存状態は悪い。

両遺跡とも縄文時代中期後半から後期前半にかけての遺跡であることがおおよそであるが分かっている。表1に周辺遺跡一覧表を載せてあるので、これを参照していただきたい。

V 調査方法と調査結果

1 調査方法と層序

調査方法

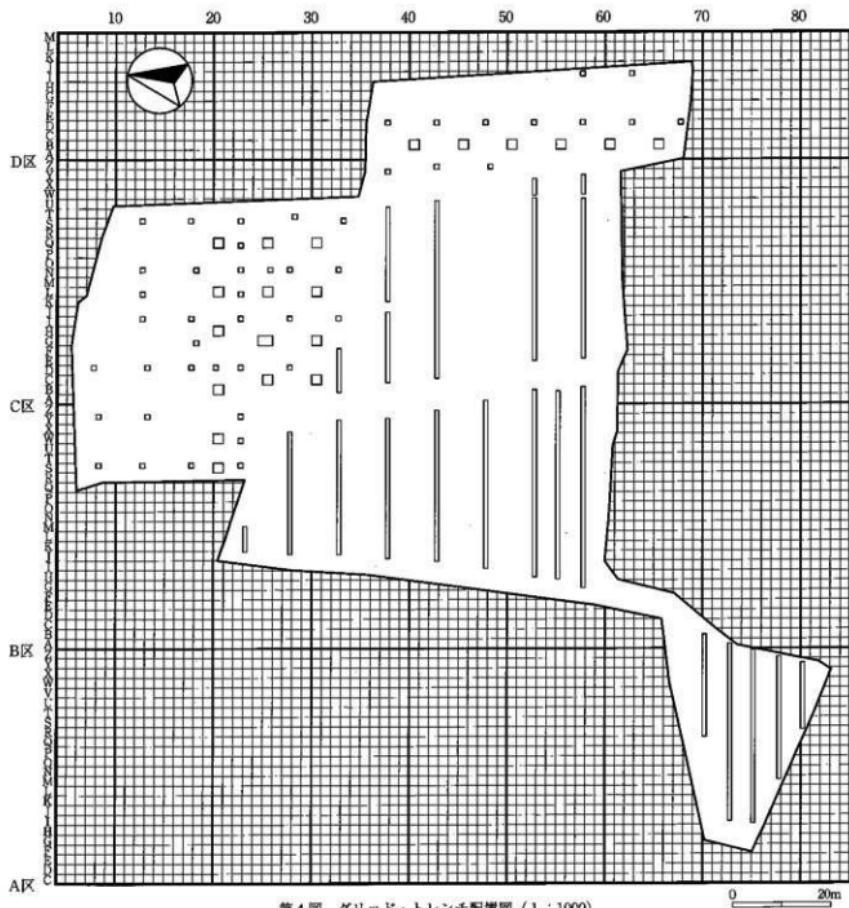
今回の調査対象地は、住宅団地造成予定地、取り付け道路等を含めた面積は9972.13m²となっている。公社が設定した基準点を原点として2m×2mのグリッド設定を行った。山林部では2mグリッドの掘

表1 ワナバ・柄の木遺跡と周囲の遺跡一覧表

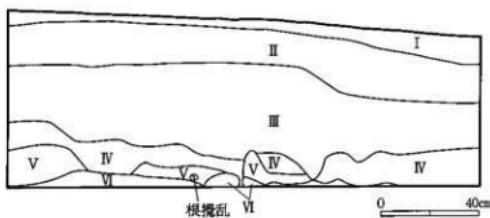
○は遺物発見 ○は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文		古墳	奈良	平安	中世	近世	遺構・遺物	備考
			草	早							
29	向尾根		○	○			○		○	(縄)集石、前・中・後期土器片、打製石斧、磨石、凹石、石鑿等 (平)土師器片、灰釉陶器片 (近)墓壙	昭和50・54年度発掘調査
30	南尾根		○			○				(縄)中期土器片(平)土師器片	
32	大横道上		○	○			○			(縄)中期住居址、後期敷石住居址、中・後期土器、打製石斧、石皿、凹石、石鑿、有頭石棒等(平)灰釉陶器 昭和42・51年度発掘調査 昭和51年一部破壊	
33	ワナバ		○	○						(縄)中期住居址、後期敷石住居址、小窓穴、中期土器、打製石斧、石匙、石錐、石鑿、石錐、石皿等	昭和51年一部破壊
34	柄の木		○	○						(縄)中・後期土器片、脚付石皿、石棒、垂玉等	昭和42年一部破壊
35	臥竜			○	○			○		(縄)中期住居址、後期敷石住居址、中・後期土器、小形有孔附土器、打製石斧、横刃形石器、石皿、凹石、石鑿、有頭石棒等(平)土師器片 昭和33・35・36・45・57・平成3・7・8年度発掘調査	
36	小沢沢		○	○						(縄)中期住居址、陥し穴、小窓穴、集石、早・中期土器片、打製石斧、石鑿等	平成11年度発掘調査
75	山の神上			○	○					(縄)後期住居址、後期敷石住居址、小窓穴、配石、集石、中・後期土器片、打製石斧、磨製石斧、凹石、有頭石棒、硯玉等	昭和46・57・平成8年度発掘調査
99	中尾根頭			○				○		(縄)中期土器片、打製石斧、横刃形石器、磨石、凹石、スクレイバー、石鑿等(平)後期住居址、土師器、須恵器、灰釉陶器、炭化穀子	平成10年度発掘調査

り下げが困難であるため、グリッド内を4分割し、立木のない箇所を選び1m×1mグリッドを人力で掘り下げることにした。トレンチは10m間隔に設定し、幅は重機のパケット幅と同じ80cm幅となっている。当初の予定では、グリッドを41箇所、トレンチを18箇所空けるつもりであったが、遺物が出土したグリッドの周囲に遺物が散っている可能性を考慮して、グリッドを7箇所、トレンチを1箇所追加した。CW-Y-57とCX-Y-53グリッドは重機による掘り下げが可能であったため、トレンチ同様の幅で掘り下げを行った。この期間の調査では、遺物は僅かな出土量にとどまり、遺構の確認はできなかった。山林部から遺物の出土を確認したが、1m×1mグリッドでは遺構の確認がしづらいため、土地開発公社と協議を行い、山林部の伐採を公社にお願いした後に、調査の続きをすることにした。中断前の調査で遺物が出土したグリッドのあるBQ-CW-6-34を中心に2m×2mグリッドを20箇所空けることにした。伐採後も切り株が残っているため人力による掘り下げを行い、合計でグリッド68箇所、トレンチ19箇所を調査し、調査面積は563.04m²となった。



第4図 グリッド・トレンチ配置図 (1 : 1000)



第5図 CL-31グリッド南壁土層図 (1 : 20)

層序

B S - 21・C L - 31グリッドの2箇所を70cm程度深掘し、土層観察を行った。本来、尾根上の基本層序は、表土層、包含層、漸移層、ローム層（新期テフラ）となっている。今回の調査地の堆積状況は、包含層の黒色土が真黒色土（漆黒）と呼ばれるような色調をしており、この下層から大小様々な礫が確認されている。また、新期テフラははっきりとした層序ではなく、異なるロームがブロック状に混ざって堆積し、ローム内に黒褐色土が斑状に入り込み、礫が混入している堆積状況であった。この様に調査地はこれまでの尾根の基本層序とは異なる堆積をしているようであり、層序を確認することが困難であったが、C L - 31の層位がなんとか確認できる状態であったので第5図に掲載した。おまかに基本土層は下記の通りである。

第Ⅰ層 黒色土層	表土・耕作土である。
第Ⅱ層 真黒色土層	真黒土（漆黒）で下位には大小様々な礫が見られ、遺物包含層である。
第Ⅲ層 暗褐色土層	遺物包含層である。
第Ⅳ層 暗黄褐色土層	ローム層。礫を含み、上層の暗褐色土が斑上に混じる。
第Ⅴ層 黄褐色土層	ローム層。赤色、黒色スコリアを少量、礫を含む。
第Ⅵ層 暗黄褐色土層	シルト質の土層。赤色、黒色スコリアを少量含む。

2 調査結果

遺構

今回の調査では遺構の検出は確認出来なかった。C G - 26グリッドで焼土を検出したが、表土から数cm程度下げた面で検出されたものであった。調査区内に伐採した木材を燃やした痕跡があったため、現代のものであると判断した。

遺物

出土した遺物の総数は41点である。内訳は土器片（縄文土器・土師質土器・陶磁器を含む）29点、石器11点、時期不詳の鉄片1点であり、詳細は表2に記載してある。土器はいずれも小破片ばかりで、完形に近い物は出土していない。出土した遺物のほとんどが2層下位から3層中位の礫の間から出土している。

縄文時代

土器（第6図、写真11）

1は横位の沈線と櫛歯状工具による縦位の条線が施され、縄文時代中期後半の曾利Ⅲ式に属すると思われる。2は方形の区画文と縄文が施されているが、縄文の原体は判別できない。縄文時代中期後半の曾利Ⅳ・V式に属すると思われる。3は縦位に半隆帯、櫛歯状工具による条線が施され、縄文時代中期後半の曾利V式に属すると思われる。4はL Rの縄文を斜位、形が不明ではあるが、沈線が施されている。型式は不明であるが、縄文時代中期末葉に属するものと思われる。5は筋が小さいR Lの縄文を斜位、梢円の沈線と横位の沈線が施文されている。内面に僅かながら横位の沈線らしき痕跡を見受けられるところから、口縁部付近の破片と思われ、縄文時代後期前半の堀ノ内式に属すると思われる。6は縦位に沈線が3条、波状の沈線が1条、縦位のL R磨り消し縄文が施され、縄文時代後期前半の堀ノ内式の鉢形土器と思われる。

石器（第6・7図、写真11）

7は变成岩製の打製石斧である。8は安山岩製の凹石・磨石であり、表裏両面に凹、磨り痕、左側縁に敲打痕が見受けられる。9は安山岩製の凹石・磨石であり、表裏両面に凹、表面に磨り痕、右側縁に敲打痕が見受けられる。10は安山岩製の台石であり、表面に凹、裏面に敲打痕が見受けられる。

中世

土師質土器（第7図、写真11）

11は推定口径31.4cm、推定底径27.2cm、器高8.1cmを測り、口唇部は角頭状を呈する。砂粒が多く特徴的な胎土であることから、おそらく内耳鍋の破片であろう。ナデによる器面成形による稜を確認できるが、ロクロ成形ではない。14~15世紀の内耳鍋に比べ器高が低く、成形が異なることから、やや時代が新しくなると思われる。12は推定口径31.2cm、推定底径27.2cm、器高7.2cmを測り、口唇部は角頭状を呈する。11同様に内耳鍋の破片である。

表2 出土遺物一覧表

出土地点	時 期	種 別	器 種 名	数 量	説 明	掲載番号
B S - 21	縄文時代中期	縄文土器	口縁部破片（無文）	2		
	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（有文）	2		
	不明	不明	口縁部破片（無文）	1		
	現代	陶器	陶器破片	1		
B S - 23	不明	磨製石器	砾石	1	凝灰岩	
	縄文時代	砾石器	凹石・磨石	1	安山岩、(長) 9.7cm (幅) 5.3cm (厚) 3.3cm (重) 246g	8
B W - 21	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（有文）	1	曾利IV or V	2
B Y - 9	縄文時代	剥片	剥片	1	黒曜石	
C C - 31	縄文時代	剥片	剥片	1	黒曜石	
C D - 18	現代	磁器	磁器破片	2		
	中世	土師質土器	内耳鍋	1	内底付近にスス付着	11
C G - 19	縄文時代中期後半	縄文土器	土器破片（有文）	1	曾利III	1
	縄文時代中期後半	縄文土器	土器破片（有文）	1		
C G - 31	中世	土師質土器	底部破片（無文）	1	内耳鍋	
	縄文時代中期後半	縄文土器	土器破片（有文）	1	曾利V	3
C H - 21	縄文時代中期後半	縄文土器	土器破片（有文）	1	中期末葉	4
	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（無文）	2		
C I - 13	中世	土師質土器	口縁部破片	1		
	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（無文）	1		
C I - 33	中世	土師質土器	内耳鍋	1	外面炭化物付着	12
	縄文時代	砾石器	台石	1	安山岩、(長) 23.3cm (幅) 18.3cm (厚) 10.9cm (重) 6000g	10
C L - 13	縄文時代中期後半	縄文土器	土器破片（有文）	1	中期末葉	
	縄文時代	剥片	剥片	1	黒曜石	
C L - 21	中世	土師質土器	底部破片	1	内耳鍋	
	中世	土師質土器	土器破片	1	内耳鍋	
C L - 26	縄文時代	砾石器	凹石・磨石	1	安山岩、(長) 10.5cm (幅) 8.4cm (厚) 5.5cm (重) 525g	9
	中世	土師質土器	口縁部破片	1	内耳鍋	
C N - 23	不明	磨製石器	砾石	1	不明	
C Q - 23	縄文時代	剥片	剥片	1	黒曜石	
C Q - 31	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（無文）	2	中期末葉	
	縄文時代後期前半	縄文土器	土器破片（有文）	1	壠之内	5
D B - 41	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（無文）	1		
D B - 46	縄文時代中期	縄文土器	土器破片（無文）	1		
D B - 51	縄文時代	剥片	剥片	1	黒曜石	
D B - 61	縄文時代後期前半	縄文土器	土器破片（有文）	1	壠之内、鉢	6
	縄文時代	打製石器	打製石斧	1	变成岩、(長) 8.3cm (幅) 5.2cm (厚) 1.4cm (重) 72g	7

VI まとめ

前章の調査結果で既に述べたが、今回の調査で遺構は検出できず、出土遺物もごく僅かであったため、集落址としての性格を補足する資料は見つけられなかった。ただし、調査の目的である遺跡範囲を推定することは可能であろう。また、調査地の堆積はこれまで尾根上の調査で確認してきたものとは異なる堆積状況であることがわかった。そこで、下記に遺跡範囲と土層堆積について述べることにする。

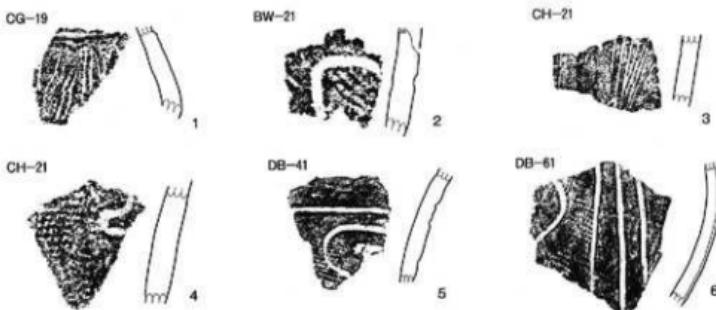
第II層の真黒色土はこれまでの発掘調査では尾根斜面の沢付近で確認され、この下層及び斜面下方のローム層にもやはり大小様々な礫が確認されている。また、CL-31、CC-31グリッドからは沢に見られる玉砂利のような小石が確認されている。さらに地形のことでは、本遺跡の南を流れる阿久川の沢が浅くなっていること、グリッド31～34付近が若干窪んでいることを踏まえると、調査地は沢があつた可能性が考えられる。しかし、これだけでは確定するには不十分であり今回は可能性を指摘する段階に留めておく。ただし沢でなかったとしても、阿久川の氾濫により堆積した土が流れ、土層に見られる大小の礫が運ばれたために、層位が確認しにくい堆積状況となった可能性は非常に高いと考えられる。また、この地域の伝承によると、「この地は地味が痩せ、こしょう（トウガラシ）が赤熟しないほど寒冷の気候であり、そのうえ大早川の洪水や凶作続きたまりかね、ドッテ村作りをやり直した」と伝えられている。この伝承の中に大早川の洪水があることを踏まえると、この地は洪水が起こりやすい土地であったことがわかる。今回の調査で出土した遺物は流されてきた遺物である可能性が考えられるが、土器および石器のカドに丸味は見られないことから、流されたものではないと判断し、これに基づいて遺跡範囲を考えることにする。

全ての遺物はグリッドより出土し、トレンチからの出土は確認できなかった。つまり、遺物の分布は調査区北側と東側の山林部に限定され、その他の地点では遺物の確認できない空白地となっていることがわかった。B区のグリッド付近がワナバ遺跡の範囲にかかっていたが、この地点では遺物の確認ができず、遺物が出土した地点は遺跡範囲外の地点であった。そのため出土した遺物をワナバ・栃の木遺跡のどちらに含めるかが問題となってくる。ワナバ遺跡とすると、遺跡範囲からは出土地点の間に空白地を挟むことがやや問題となり、これに比べ栃の木遺跡とすると、調査区北側の出土地点はほぼ同じ標高にあり、遺跡範囲の近くに位置する。これらを考慮にいれると、栃の木遺跡の範囲をDB-61グリッド付近まで広げることにした方が良いと考えられる。ただし、ワナバ・栃の木遺跡は共に縄文中期後半から後期にかけての集落遺跡であり、同尾根上の近くに位置しているため、一つの遺跡である可能性があるが、結論付けるためにはさらなる資料が必要である。

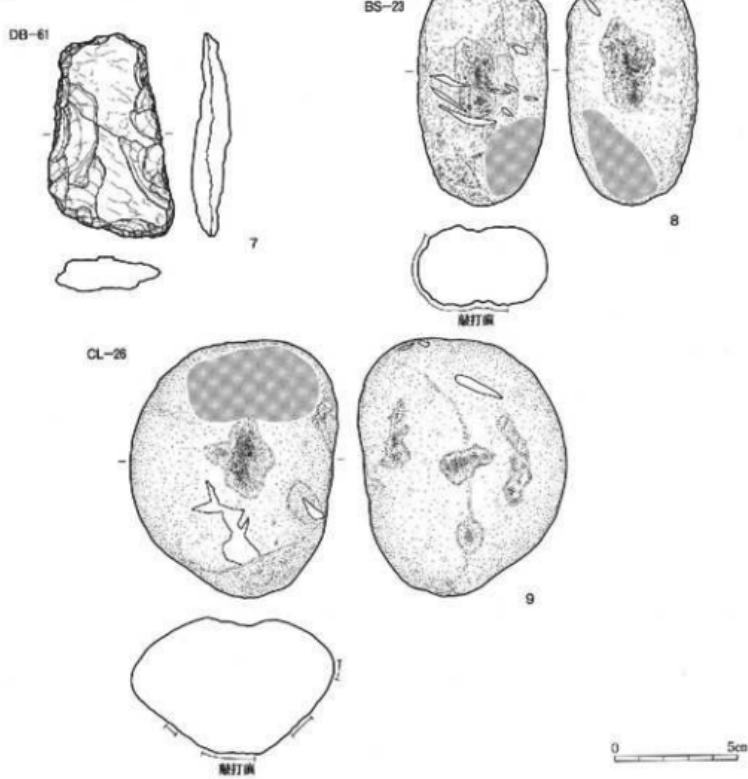
今回の調査の成果としては調査対象地の特殊な地理的要因があること、栃の木遺跡とワナバ遺跡の遺跡範囲を確認することができたが、遺構のない場所にごく少量の遺物がなぜあるのか、どの様な経緯でこれらの遺物がここから出土したのか、非常に興味深いことである。

最後に理解あるご協力をいただいた関係者各位ならびに調査に携わられた方々に厚くお礼申し上げる。

【縄文土器】



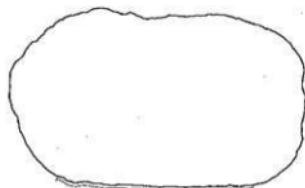
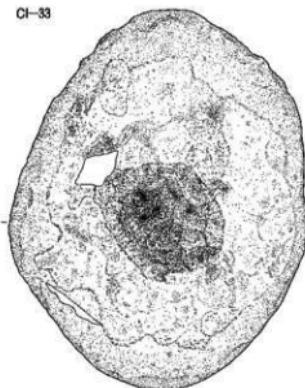
【石器】



第6図 出土遺物実測図・拓影 (1 : 2)

【石器】

CH-33

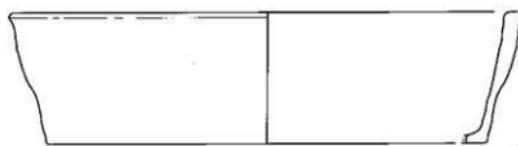


敲打痕

10

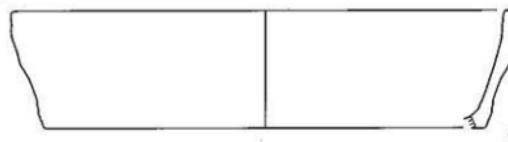
【内耳鏡】

CD-18



11

CH-13



12



第7図 山土遺物実測図・折影 (1 : 3)



写真1 調査地区 調査前風景（南西から）

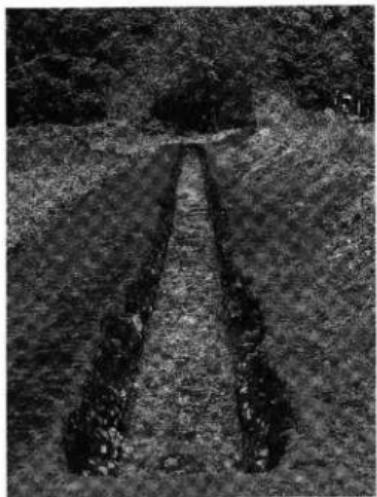


写真2 48ライントレンチ（西から）

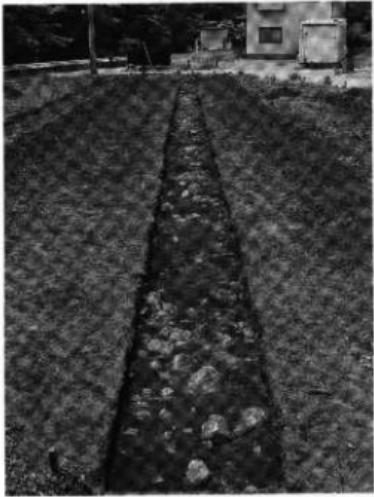


写真3 73ライントレンチ（東から）

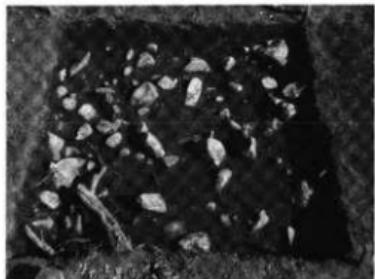


写真4 DB-46グリッド（西から）

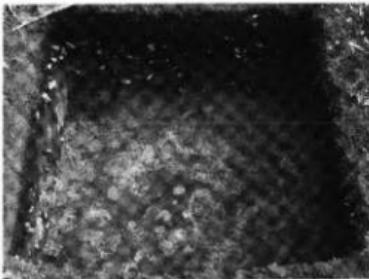


写真5 BS-21グリッド深掘（西から）

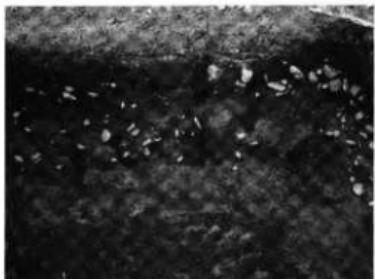


写真7 BS-21グリッド北横土層（南から）

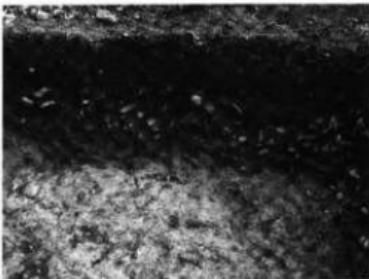


写真6 CL-31グリッド南横土層（北から）



写真9 作業風景



写真10 調査完了風景（南東から）

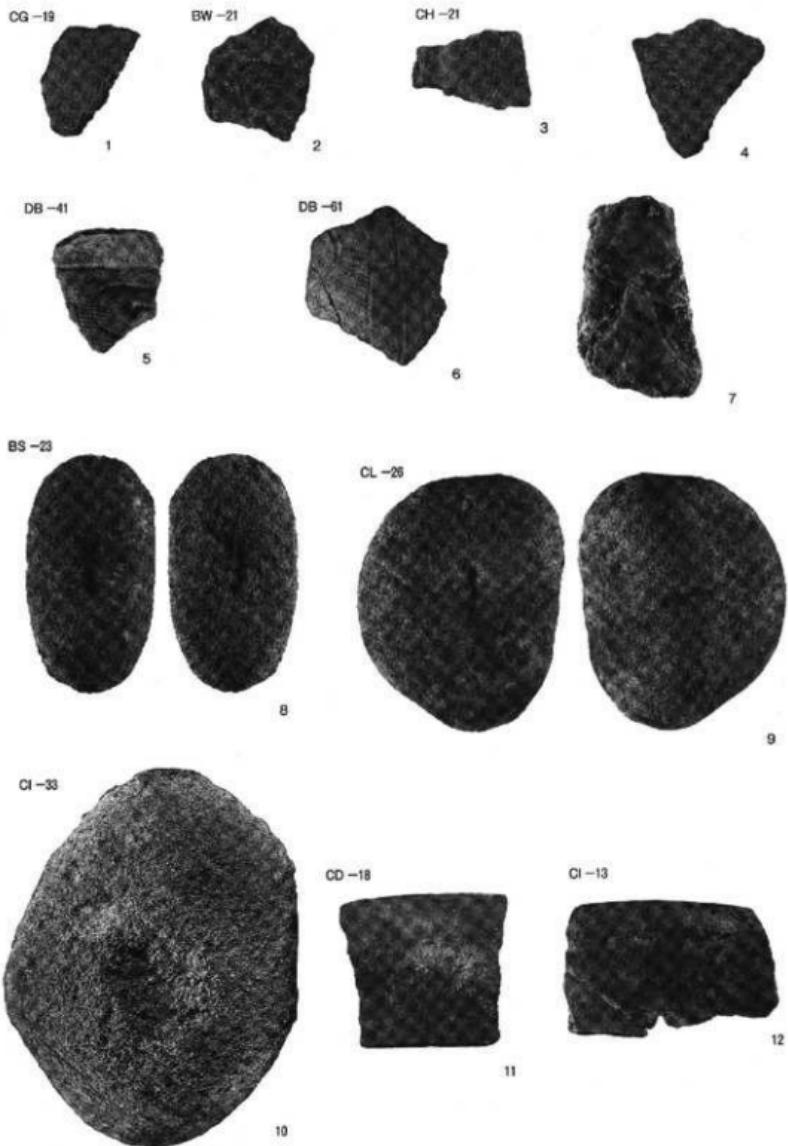


写真11 出土遺物 (3・7・8 1:3 その他 1:2)

参考文献

- 信濃史料刊行會 1956 「信濃史料 第一卷 上」
- 長野県教育委員会 1982 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5 昭和52・53年度」
- (財)長野県埋蔵文化財センター他 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 松本市内その1 - 総論編」 (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4
- 原村役場 1985 「原村誌 上巻」
- 原村教育委員会 2000 「原村の遺跡」

原村の埋蔵文化財74

ワナバ・楊の木遺跡

平成21年度 「払沢上住宅団地」造成事業
に先立つ緊急遺跡範囲確認調査報告書

発行日 平成22年3月

発 行 原村教育委員会
長野県源訪郡原村

印 刷 はおづき書籍社

報告書抄録